



江戸城錦絵(国立歴史民俗博物館蔵)



連載 第5回(最終回)
**農政家二宮尊徳と
 治水家船橋隋庵**

作家 高崎 哲郎

**農政家二宮尊徳
 小を積んで大を成す**

私は江戸後期の農政家二宮尊徳(幼名金次郎、1787-1856)の70年間の生涯と実践的思想に心打れるものがあり、『尊徳全集』や関連図書などを読破して来た。尊徳は「報徳思想」の祖として偶像化され(時には歪曲化され)過ぎた感も否めない。彼が開墾した田畑を訪ねてまず思う

ことがある。それは、彼が稀に見る巨漢の農民だったという事実だ。彼は身長6尺余り(約1メートル90センチ)、体重25貫(約90キロ)もあった。巨体から発散する強烈な実行力を思わずに、尊徳の勤儉力行の精神や農村復興・農民救済の情熱、仕法は理解できないと考える。

尊徳は天明7年(1787)、相模国栢山(現神奈川県小田原市栢山)の酒匂川右岸に住む地主の長男に生まれた。尊徳は飢饉の最中に農家に生まれたのである。



二宮尊徳生家
 (神奈川県小田原市栢山)

る原理を自得したのも、この苦難の時である。尊徳が凡百の篤農家と異なる点は、思考や行動を家・村の枠内に留めず、それを越えて思想を社会化し、広範囲にわたる実践活動を展開したところにある。

一家を廃して万家を興す

かつて2町3反余(13石)を所持していた彼の生家は、打ち続く災害により家運が傾きつつあった。加えて、14歳で父を、16歳で母を相次いで失う。家産も父母も失った彼は、伯父の家に預けられるが、家の再興の悲願に燃えて、一人黙々と荒地に鍬を打ち込み、ついにそれを達成する。勉学も怠らなかつた。この体験が彼を強靱な人物に鍛え上げ、彼の思想形成の原点になった。「小を積んで大を為す」。彼の全生涯にわた

尊徳がまず実績を示したのは、小田原藩家老服部家に奉公中、その家政改革に成功したことが藩主大久保忠真の耳に入り、その手腕を見込まれて分家宇津家の知行所下野国桜町領(現栃木県真岡市二宮町)の復興を命じられた時のことである。藩主の命令とはいえ家を捨てて未知の郷に赴くことは、大きな心理的葛藤があった。だが彼は「一家を廃して万家を興す」と決心し、先祖伝来の田畑を売り払って資金をつくり、文政6年(1823)、桜町に赴く。

桜町領の復興事業を推し進めて

いく過程で、彼はたびたび壁に突き当たったが、そのつどそれを乗り越え、天保の初年(1830)には一応の成果を見るに至る。その過程で彼の思想は深まり「興国安民」の学として結実する。一方で、それを実現するための方策(方針)や仕法(対処法)も体系化されていった。折からの凶作・飢饉を機に、領主や農民、商人らから仕法の依頼が相次いだ。天保13年(1842)には幕府官吏に登用されるに至っている。「尊徳」を名乗るのは、この頃からである。主な仕法の実施地は、谷田部・下館・小田原・相馬・掛川などの諸藩領、真岡代官直轄領の幕府領、日光神領などであり、この他個別の村の立て



二宮尊徳
(提供：報徳博物館)

た。印旛沼から南の馬加村(現幕張)の海岸までは4里(16キロ)である。幕府が失敗を重ねて来た大事業への再挑戦である。幕府の悲願とも言えた。

難問は山積していた。水路の中途に高台と名付けられたところがあり、高さ数丈(10メートル以上)あって、その上岩山だった。これを掘るのは堅い岩を掘ることよりも大変だった。下は海べりから数百間(約500メートル)離れたところに天神山という小山があった。二つの山の間は土地が低く、泥土の深さを測ることが出来なかった。ここは典型的な軟弱地盤で、深く掘ってもすぐに元の地形に戻ってしまう。

尊徳はいっこうに幕府に建言しようとしなかった。幕府首脳は尊徳に繰り返し問うた。

「そなたの見るところはどのようなだ？」

尊徳は答えた。「私はまだその成功・不成功を決めることはできません。た

直しや個人的な家政改革も数多く手掛けた。

尊徳は「興国」の基礎は「安民」にあると考へ、為政者に対し民衆生活安定のための政策を施すべきことを強く主張した。それは、領主の恣意的な年貢収奪と勤農の不行き届きこそが、農村を荒廃させた根因であるという現実認識に立っている。それだけに、彼が仕法を引き受けるにあたって提示した条件は、領主が自らの財政に「分度」を設けて經常支出をその枠内に抑え、それを越える収入は窮民撫育、荒地開発のために「推譲」することであった。その上で、民衆に対して内発的な勤労意欲を促し、富農商には「私欲を抑えて公益をはかる」べきことを説き、余剰を仕法資金に「推譲」させた。

印旛沼堀割を批判

利根川から印旛沼を経て開削水路を通り、内海(江戸湾)に達し江戸に到着

だ、成功しそうな方法で実施する時には、何千万人を使役し、何百万両の財を費やしても成功はおぼつかない。成功する方法で事業を起こす時は、どのように困難なことでも成就しないことはないでしょう」

万民をいつくしむ

幕府首脳は再度たずねた。「その成功しそうな方法とはいかなるものか？」

尊徳は答えた。「天下の御威光と権力をを以て、人夫を酷使し、あるいは夫役の代わりに金を出させ、年を限って事業の成就を急ぐ。これは土木工事のいつも変らぬやり方です。この方法で行おうとすると、難所の工事は役人も領民もともに困窮し、ただ利益のみを図って、義の心を忘れてしまいます。工事は進行せず、資材はすぐに尽き、年限に達しても事業は半分にも達していません。役人も領民も共に不正にはまり、

することが出来れば、航路も短縮され、船の沈没の心配からも免れ、外敵の防御にも役立つ。幕府はすでに2度もこの大計画に取り掛かり、数十万両(今日の数百億円)の巨財を費やして掘ったが、結局は地形の高低差が読み切れず途中で投げ出した。幕府が再度この難事業を遂行しようとする意図は、水運に大きな利益をもたらし、流域住民を水害から救おうという政治判断から出たものであった。

江戸後期の天保13年(1842)10月、幕府は普請奉行二宮尊徳に現地に赴くように命じ、土地の高低・難易を図って計画の実現性を検討させた。その上で具体策を言上せよと命じた。(『利根川分水路見分目論見御用』)。尊徳は江戸を発つて下総国(現千葉県)の印旛沼に赴き、同行の役人たちと連日、利根川下流や印旛沼とその周辺を歩きまわった。土地の高低・地質を検分し、成功するか不成功に終わるかを熟慮し

事業は結局廃止されてしまうでしょう。これが成功しない理由です」

「まずしなければならぬこととは何か？」

「万民をいつくしみ育てることです」。

「後にすることは、何か？」。

「まさに印旛沼掘割普請です」。

「今そちに求めているのはその掘割だ。なぜ万民を育成することを先とするのか。これは別のことであって事業には関係ない」

「万民が誠意を主とする時は、たとえ山を抜き、石を掘るといっても成功しないはずはない。このようにする時には、大事業の成就是回り道のようにあるが、かえって早いものです。つまり基礎を固めた時には、繁栄は既にその内にあるようなものです。そこで何を先にし、何を後にするかによって大事業の成功・不成功が決まると申したのです」

尊徳はこう言上した。後にこの意見

を充実させて「見込書」2巻を書き上げたが、期限に遅れたため献上しなかった。周囲の人々は「書」を献上しないことを惜しんだ。

近代日本の代表的キリスト教指導者内村鑑三は「余の見たる二宮尊徳翁」(明治37年6月、『静岡民友新聞』)で尊徳を称賛する。「二宮先生は印旛沼の開墾事業を以て道徳問題となしたり。今日の教師等に此の見識ありや。測量や水利や只之を以て土木事業を成就すべしと思うは非なり。先生は150年以前に已に日本にありて以来の卓抜の識高潔の徳を以てかくの如き復命を為したり。今日の経済学者は先ず算盤を手にす。先生は先ず至誠の有無を質す。吾人、先生に学ぶ所なきか」

勤・儉・讓の思想

尊徳は思う。目の前には疲弊した農民が何十万人といる。天災や飢饉に襲われれば至る所に死体が転がる。それ

た。大激動期の幕末に、農民たちを打ち続く飢饉から救おうと治水対策や開墾事業に立ちあがったのが重臣船橋随庵であった。

江戸後期を代表する治水家・経世家の一人船橋随庵は、寛政7年(1795)に関宿藩士・船橋周能の次男として生まれた。嘉永元年(1848)には関宿藩中老(最高幹部の一人)に昇進し、その年10月関宿江戸町から荏打までの約20キロメートルに及ぶ「関宿落堀」の開削工事を指揮した。土木知識の基礎は、青年時代から治水技術を伊奈家の(関東流)と井澤弥惣兵衛の(紀州流)から習得したものだ。嘉永3年、工事は1年余をかけて随庵の見積通り完成した。その功績によって緑20石を増加された。当初、関宿落堀は洪水などで関宿城内に溜まった悪水を城外へ排除するための排水路だった。随庵が水路開削を行ったことで、水害から村人の生命・財産を守るようになっただけでなく、

を救わなくて何の教えであるかと言うのか。そうして導かれたのが勤・儉・讓の思想であった。

彼はいかなる開墾や復興でも事前に精密な計画を立てた。独自の計画を「仕法」と呼んだ。この仕法の発想が彼を成功に導いた秘訣のひとつだった。それ以上に重要なのが「分度」である。

勤・儉は個人の生活だが、讓に至って初めて社会が出て来る。讓があつて道徳が出て来る。個人の生家を保つためには、一定の枠がなければならぬ。その枠が「分度」である。彼は復興事業に携わる際には「分度」を定める。それは経済の枠である。その経済の枠内で農村の立て直しや農民の生活の再建を図った。手掛けた再建計画はほぼすべて成功した。尊徳は、人間の社会的・経済的なあり方を勤・儉・讓と分度で律した。「我が道は至誠にあり」との彼の言葉は、それを貫く精神であった。幕末の偉才勝海舟は言う。「二宮尊

徳は、農業用地に転用できるようになった。米や農作物の生産が飛躍的に増大した。農民には新たに誕生した新田の配分も行つた。

随庵は学者でもあつた。『古今田制通考』『助郷考』などの著作を著して助郷批判や農兵制導入などを唱え、江戸幕府に対して利根川治水に関する意見書などを献上した。安政3年(1858)老齢を理由に隠居した。文久2年(1862)随庵の提言に基づく農兵制が関東ではいち早く関宿藩に導入された。

明治政府は、随庵の才覚を惜しみ新政府に参画させようとしたが、高齢を理由に固辞した。明治5年(1872)病没、享年78歳。文武両道にひいで率先垂範する随庵、獄中から血書で無実を訴えた随庵、農民に光を与えようといち早く農兵隊を結成した随庵…。随庵は希代の治水家であり、それ以上に幕藩体制が終焉を迎えていることをいち

徳には一度会つたが、いたって正直な人だったよ。だいたいあんな時勢には、あんな人物がたくさんでるものだ。時勢が人をつくる例は、おれは確かに見たよ」(『氷川清話』)。辛辣な人物評で知られる海舟の讃辞である。

偉大な治水家船橋随庵

関宿藩重臣船橋随庵は隠れた偉人である。関宿藩は石高5万石の譜代大名としては小藩であり、関東平野の中央部を流れる大河・利根川と江戸川の分派点に城を構えていた。城主は徳川幕府の老中などを輩出した名門久世家であった。大河には生まれ川の関所を構えていたこの地は、江戸期を通じて河川輸送(舟運)の拠点として栄えた。だが大河は繁栄ばかりをもたらさなかった。

関宿は、一方で繰り返し洪水に見舞われた。排水できない泥水の沼地となり、挙句に耕作できない湿地が広がっ

早く読んで警鐘を鳴らした傑出した政治思想家、農業経済理論家であった。北野道彦『利根運河』(崙書房)によれば、利根川と江戸川の間には運河を開削し、治水と通船の便に供するという案は、すでに嘉永6年(1853)船橋随庵の記録の中に見えるという。随庵の墓は野田市関宿町の宗英寺にある。



船橋随庵の墓碑(千葉県野田市)

参考文献：『報徳記』(中央公論社)、「二宮尊徳の生涯」(『日本の歴史』9)、『朝日新聞社』、拙書『開削決水の道を講ぜん(随庵伝記)』、筑波大学附属図書館文献。